

# コフートの自己心理学に基づく 自己愛的脆弱性尺度の作成の試み

上 地 雄一郎・宮 下 一 博\*

## A Study of Narcissistic Vulnerability Scale Construction from the Viewpoint of Kohut's Psychology of the Self

Yuichiro Kamiji and Kazuhiro Miyashita

**Abstract :** The purpose of this study was to construct and validate a scale measuring narcissistic vulnerability from the viewpoint of Kohut's psychology of the self.

After reviewing earlier studies on narcissistic disorder, narcissistic vulnerability was defined as difficulty in maintaining psychological equilibrium and self-esteem. It was assumed that narcissistic vulnerability consists of the following five aspects: dependence on approval and admiration from others, demand for concern, failure of self-exhibition, insufficiency of self-soothing ability, and insufficient sense of purpose.

Fifty-two preliminary items representing these aspects were administered to 398 students. On the basis of principal component analyses with promax rotations, 45 items were selected from these 52 items and they were grouped into five subscales corresponding to the above aspects. The reliability coefficients (Cronbach's  $\alpha$ ) for these subscales ranged from 0.77 to 0.88. The whole of these subscales was named the Narcissistic Vulnerability Scale. This scale was validated through its correlation with the Two-Dimensional Narcissism Scale (Takahashi, 1998) and the Identity Diffusion Scale (Sunada, 1979).

**Key Words :** psychology of the self, narcissistic vulnerability, scale, reliability, validity

### 1. はじめに

最近、精神医学や臨床心理学において自己愛に関する諸問題への関心が増大し、心理学的尺度を用いた研究も行われるようになり、自己愛的傾向を測定する複数の尺度が登場している(上地・宮下, 1992 a, b)。そのなかで最も有名なものは、Raskin & Hall (1979, 1981)の自己愛人格質問票(Narcissistic Personality Inventory: NPI)であろう。筆者らも、Emmons (1984)によるNPIの因子分析を参考にして項目を選定し、原法の強制選択方式を7段階評定方式に変更した日本語版を作成した(宮下・上地, 1985; 宮下, 1991)。

その後、NPIは複数の研究者が日本語版を作成し、これを用いた研究が行われている(佐方, 1986; 大石・福田・篠置, 1987; 小塩, 1998)。NPIは、DSM-IIIの自己愛人格障害の診断基準を基にしているが、より広範な自己愛的傾向を測定することを目的にしている。そして、NPIでは、自己愛のなかでも誇大的あるいは自己顕示的な側面が強調されている。しかし、自己愛の障害をめぐる最近の議論においては、誇大的・自己顕示的な側面だけでなく、過敏で傷つきやすい側面にも注目が集まっている。また、NPIのもう一つの問題点は、一部の因子を除いて、健康な人格特性との間に相関が見られることである(岡田, 1999)。筆者らは、このようなNPIの問題点を克服するために、自己愛に関する代表的理論の一つであるKohutの自己心理学に基づく新たな質問紙尺度の作成を試みてい

\*千葉大学教育学部

る。今回は、その試案の作成と信頼性・妥当性の検討の途中経過を報告する。

## 2. 自己愛の障害についての理論的検討

まず、自己愛人格障害を含む自己愛の障害について理論的に検討し、筆者らの視点を明確にしておきたい。自己愛とその障害に関する最近の研究としては、破壊的な自己愛を問題にした Kernberg など対象関係論者の流れと、自己愛の健康な発達とその停滞に焦点を当てた Kohut の自己心理学の流れが主要なものであろう。

Kernberg (1970, 1976) は、自己愛人格障害などに見られる病理的自己愛と正常な自己愛を明確に区別した。Kernberg のいう自己愛人格障害は、肥大した自己概念 (誇大自己 *grandiose self*)、他者から賞賛されたい欲求の過剰さ、他者への興味と共感の乏しさ、自分の欲求を満たしてくれる人への理想化とそうでない人への価値切り下げ、他者への強い羨望、他者への本当の依存の困難さ、原始的防衛機制、自己愛空想や栄誉ある孤立への逃避などの特徴を持った人たちである。Kernberg の言う誇大自己とは、現実自己像のなかで親などから特別視された部分、理想的自己像、理想的他者像が融合して出来上がる肥大した自己像であり、正常な人には見られない。自己愛人格障害の人は、他者の必要性や他者への依存を否認し、その代わりに誇大自己を支えにしているのである。誇大自己は、親子関係で耐え難い欲求不満を体験したために発生し、羨望や憤怒を覆い隠す防衛でもある。Kernberg の考え方は、英国対象関係論における「自己愛構造体」の議論にも影響を与えているが (岡野, 1998)、このような考え方に共通しているのは、病理的自己愛は、他者への本当の依存を否認する偽りの自己充足だということである。

一方、Kohut のいう自己愛人格障害は、仕事への熱意の欠如、人間関係を維持することの困難さ、共感性やユーモアの感覚の欠如、突発的な憤怒、自律神経系の症状や心気症の症状、性への関心の欠如や倒錯的傾向などを特徴とする。そして、詳細に吟味すると、心理的安定を維持することの困難さ、自己評価を調節することの困難さ (些細なことで自己評価が低下する; 自己顕示欲求を感じると強い恥・自意識過剰・誇大的空想が生じる)、理想システムの障害 (内的基準や理想に従って自分を方向づけることができず、外的他者の承認を必要とする) などが見いだされる (Kohut,

1971)。Kohut も、自己愛人格障害に見られる誇大性を誇大自己と関連づけて説明するが、それは Kernberg の言う誇大自己とは異なっており、幼児が自己を全能・完全であると感じるために自己を顕示して親からの承認・賞賛を得ようとするを指している。親が子どもの誇大自己に対して適度な承認や賞賛を与えながら現実的限界をも知らせていくとき、誇大自己は野心的な目標や現実的な自己評価に変容する。しかし、この過程が阻害されると、幼児的な誇大自己は未成熟なまま残存することになる。それは二つの形態を取る。一つは、母親によって過剰に評価・賞賛された部分であり、これは公然と表出されるようになり、他者の目には誇大的で尊大なものに映る。もう一つは、母親から無視あるいは拒否された部分であり、これは抑圧されてしまう。そして、重要な自己の部分が抑圧される結果、自己評価が低く抑うつ的で恥を感じやすい自己の部分が出現する。このような矛盾する二つの自己の並存を Kohut は「垂直分割」*vertical split* と呼ぶ。なお、Kohut によれば、誇大的・顕示的な部分の目立たない症例も見られる。

幼児期に構造化される自己愛の形態の一つとして、誇大自己とともに Kohut があげたのが、「理想化された親像」*idealized parental imago* である。誇大自己は、全能視された自己を親から受け入れてもらうことによって心理的安定や自己評価を維持する機制と関連が深いものに対して、理想化は、親などの他者を全能視し、その全能的他者像と一体化することによって心理的安定や自己評価を維持する機制である。このような他者への理想化からも、重要な機能が形成される。幼い子どもは、強い不安や感情などを自分だけで制御 *regulate* することはできない。子どもが強い不安や感情に襲われても、平静さを備えた親とつながり一体化することでその不安や感情が緩和される体験が繰り返される時、子どものなかに自分で不安や感情を制御する力 (自己緩和能力 *self-soothing ability*) が形成される。また、子どもが親を理想化し、その後徐々に親の限界を知っていくとき、理想化された親のイメージから価値や理想が内在化され、それは自己を導く指針となる。

自己誇大化や理想化の欲求に対して親などの重要な他者が上記のような応答をしてくれる場合に、そのような応答性を体験すること (または便宜的にその他者自体) を、Kohut は「自己対象」*selfobject* と呼ぶ (Kohut, 1977, 1984)。自己がすばらしいことを賞賛されるような体験を「映し返し自己対象 (体験)」*mirroring*

selfobject (experience), 力や平静さを備えた理想化できる他者と一体化する体験を「理想化自己対象 (体験)」idealizing selfobject (experience) という。とにかく、自己対象体験を通して、様々な心理的機能が内在化され、それが心理的安定や自己評価を維持する役割を果たしてくれるので、自己は相対的に他者から独立していられるようになる。ところが、幼少期から適切な自己対象体験が欠けていると、上記のような発達が阻害され、自己を安定化させ方向づけてくれる心理的構造が十分には形成されない。そのため、心理的安定や自己評価を維持するためには、承認・賞賛してくれる他者や理想化できる他者に過度に依存せざるをえなくなるのである。

このように、Kernberg と Kohut では、自己愛人格障害に関しても自己愛自体に関しても見解の相違があるわけだが、両者の相違を説明する視点を提供したのが、Gabbard (1989, 1994) や Broucek (1982, 1991) である。彼らによれば、Kohut と Kernberg の見解の相違は、両者が対象とした患者のタイプ (Gabbard, 1994), または両者が典型と考えるタイプ (Broucek, 1991) の相違に起因する部分がある。

Gabbard が言うには、自己愛人格障害は対人的関わりの典型的スタイルに基づいて想定される連続体の2つの極の間のどこかに位置するものとして概念化できる。その2つの極とは、「周囲を気にかけない oblivious タイプ」と「周囲を過剰に気にかける hyper-vigilant タイプ」である。どちらも自己評価を維持しようと格闘しているが、対処の仕方は異なっている。周囲を気にかけないタイプは、自分の業績を他者に印象づけようとするが、他者の反応には鈍感であり、自己愛的傷つきから自分自身を隔絶させている。これに対して、過剰に気にかけるタイプは、他者の反応に敏感で、そこに拒絶や侮蔑のサインを読みとりやすい。後者は、一見すると顕示的・誇大的ではないが、内的世界では自分自身を誇大的に露出したいという願望を抱いており、それに根ざした強い羞恥心がある。Kernberg のいう自己愛人格障害は「周囲を気にかけないタイプ」に近く、Kohut のいう自己愛人格障害は「周囲を過剰に気にするタイプ」に近い。

Broucek も、Gabbard と同様の分類をしている。Broucek によれば、子どもが自己認識の能力を獲得し、自分の小ささ・弱さ・無能さに気づき、恥の体験が限度を超えると、防衛的・補償的方策として自己の誇大化が生じる。こうして、「卑下された devalued 自己」と、「理想化された自己 (誇大自己)」が登場す

る。Broucek は、理想化された自己が優位に立ち、他者からの否定的反応に対しては選択的不注意を示すような人たちを「自己中心的 egotistical タイプ」、逆に卑下された自己が優位に立ち、自己評価が低く、恥を感じやすく、拒否されることに敏感な人たちを「解離的 dissociative タイプ」と呼ぶ。解離的タイプでは、理想化された自己は分割・解離された形で存在し、どことも感じられる優越感や特権意識として姿を現す。Kernberg が自己愛人格障害の典型と考えているのは自己中心的タイプであり、Kohut が典型と考えているのは解離的タイプである。また、Broucek によると、Kohut と Kernberg の見解の相違は恥の力動についての認識とも関連している。誇大自己の形成やその分割・否認においては恥が重要な役割を演じているわけであるが、Kernberg はこの点を認識し損なっているというのである。

Gabbard や Broucek の見解を支持する調査結果も報告されている。たとえば、Wink ら (1991) は、NPI を含む6種類の自己愛尺度について、それぞれの尺度の総得点を変数とみなして主成分分析を行った結果、「誇大感-自己顕示」と「傷つきやすさ-敏感さ」という2つの成分を抽出した。そして、その際、NPI は「誇大感-自己顕示」の成分に負荷が高かった。Hibbard (1992) は、自己愛尺度を含む複数の尺度を大学生に実施し、因子分析などを行った結果、自己愛に関しては「男根的・誇大的スタイル」と「自己愛的に脆弱なスタイル」が見いだされた。そして、この両者の相違を説明する主要要因は羞恥であった。わが国では、高橋 (1999 a, b) が、Gabbard の視点に基づいて、「周囲を気にかけないナルシズム」と「周囲を気にするナルシズム」を測定する尺度を作成し、信頼性・妥当性の検討を行っている。この研究においても、仮説通りに2つの因子が確認されている。

このように考えてくると、自己愛やその障害の測定においては、露骨な優越感や自己顕示だけを主要な指標にするのでは不十分であり、Gabbard や Broucek のような視点を取り入れることも必要であろう。とくに、福井 (1998) が言うように、日本の臨床場面で観察される自己愛人格障害には、誇大感が目立たず、自己評価の低さ、抑うつ感、引きこもりなどを呈する事例が多いとすれば、なおさらのことである。その点では、上記の高橋の尺度作成は注目に値する。しかし、筆者らは、自己愛の障害の分類にとどまらず、自己愛の障害を自己の形成と関連させて発達のにとらえ、臨床群だけでなく、より軽度の問題をも査定・研究しよ

うとする立場から、先に述べた Kohut の視点に基づいて新たな尺度を作成することにした。Kohut は、自己発達の理論を土台にして自己愛の障害を理解し、病的自己愛と健康な自己愛を連続線上にあるものとしてとらえるからである。

### 3. 自己心理学的視点に基づく尺度の 検討と新たな尺度の構成概念

これまでに Kohut 理論に基づいて作成された尺度には以下のようなものがある。Patton ら (1982) は、カウンセリングの過程でクライアントの自己凝集性を測定する尺度を開発した。この尺度は、①自己表出様式、②自己主張、③野心、④他者からの分化、⑤他者への賞賛、⑥目標、⑦共感性、⑧自己評価調節の所在、⑨緊張耐性、⑩能力の使用という 10 の下位尺度から構成され、それぞれ 8 段階で評定される。しかし、この尺度は自己評定式の質問紙に転用することは困難である。次に、Robbins & Patton (1985) は、誇大自己と理想化の領域の成熟度を測定する質問紙を作成した。因子分析の結果、誇大自己に対応する 10 項目は「優越性」superiority と名づけられ、理想化に対応する 10 項目は「目標不安定」goal instability と名づけられた。同じように、Lapan & Patton (1986) は、治療を受けている 10 代の青年を対象にして、誇大自己と理想化の側面でのやや重篤な障害を測定する尺度を作成した。因子分析の結果、2つの因子が抽出され、それぞれ「偽自律性」pseudo-autonomy と「仲間集団への依存」peer-group dependence と名づけられた。

この Lapan & Patton の尺度については、岡田 (1999) や葛西 (1999) が日本語版を作成している。岡田は、「他者からの評価への過敏性」と「自己中心の主体性」という 2つの因子を抽出し、葛西は、「他者からの承認への依存」、「自己の誇大化」、「他者との同調」という 3つの因子を抽出している。さらに、葛西 (1999) は、欧米と日本では誇大感欲求に違いがあるという視点から、独自の誇大感欲求尺度を作成した。葛西は、他者から依存されたり甘えられたりすることを通して「他者にとって自分は重要であると感じる誇大感」と、他者から自分の業績を認めてもらうことを通して「他者によって満たされる誇大感」を想定し、この 2つの側面に沿って項目を選定した。因子分析を行った結果、想定した 2側面に相当する因子が抽出され、それぞれ「他者からの依存・尊重の拒否」、

「他者からの賞賛への不信・不満」と名づけられた。Lapan & Patton の尺度およびその日本語版は、他者からの承認に依存する傾向を通して理想化の側面の自己愛を測定し、自己誇大化傾向を通して誇大自己の側面の自己愛を測定していると言えよう。そして、自己誇大化の側面について日本文化を考慮した尺度構成をしたのが葛西であると位置づけられるであろう。

Kohut 理論に基づく上記の尺度では、Kohut の言う誇大自己の側面を測定するのに自己誇大化を指標にしている。しかし、Kohut の言う自己愛の障害では、誇大性の目立たない症例も見られ、全体として自己評価や心理的安定を維持する機能の脆弱性の方が顕著である。Kohut の視点に立つなら、こうした脆弱性をもっと重視すべきであろう。たとえば、自己顕示欲求を刺激されると緊張、羞恥、自意識過剰などが体験される傾向は、そのような脆弱性の指標であるが (Kohut, 1971)、上記の尺度には採用されていない。Gabbard や Broucek もこのような羞恥傾向に言及しており、その背後に隠された顕示性がある点では Kohut と一致している。また、誇大性に関して、露骨な優越感だけを指標にするのではなく、より潜在的なものも問題にすべきであろう。次に、理想化の側面については、Robbins & Patton では目標不安定、Lapan & Patton では仲間集団への依存が取り上げられている。目標不安定は、従来の枠組みで考えると自己愛的傾向とは言い難いかもしれないが、自己心理学から自己の障害を考える際には重要な指標である。さらに、上記の尺度には採用されていない、もう一つ重要な側面は、自己緩和能力の弱さ、つまり不安や感情を自分で制御・緩和する力が弱く、その制御・緩和を他者に期待する傾向である。

ところで、自己心理学の視点に立つとき、そもそも自己愛という用語の使用自体も問題になる。というのは、Kohut 理論の発展経過のなかで、従来自己愛と呼ばれていたもの、つまり承認・賞賛を求める欲求や理想化された他者と一体化したい欲求は、成熟度の差はあっても終生存在するものであるとされ、「自己対象欲求」selfobject need と呼ばれるようになった。そして、自己の出現・維持において自己対象は不可欠の要素であり、自己と自己対象は不可分のユニットと考えられている (Wolf, 1988)。ただ、自己心理学でも、自己の健康な発達が阻害されたことから生じる、自己評価・心理的安定の維持における障害を問題にするときには「自己愛的」という用語が使われているし、自己愛という用語を残しておく方が便利な場合もある。

そこで、本研究でも、心理的安定や自己評価を維持する機能の脆弱性を「自己愛的脆弱性」*narcissistic vulnerability* と呼び、今回作成しようとする尺度の測定対象とした。

そして、上記のような理論的検討に基づいて、自己愛的脆弱性の指標として、以下の5つの側面を取り上げることとした。

(1) 自己評価や幸福感を維持する上で他者からの承認・賞賛に過度に依存すること。これは、種々の自己愛尺度に含まれている側面であるが、自己心理学的に考えるとき、「映し返しを求める欲求」と「理想化できる他者と一体化したい欲求」のどちらと関連するものであるかが問題となるであろう。しかし、筆者らは、これをいずれか一方だけと対応させることはやめ、程度の差はあれ両者を反映していると考えたこととした。上記の二つの欲求は、理論的には区別できても、実際の他者との関わりにおいては併存することが多く、体験レベルで厳密な識別は困難だと思われたからである。

(2) 他者から特別の配慮を受けるに値すると感じ、そのような配慮が得られないと不満や怒りを感じやすいこと。このような傾向の背後には、特別の配慮がないと心理的安定や自己評価を保てないという脆弱性ととも、ある種の特権意識や誇大性が存在しているのではないかと思われる。これは、露骨な優越感や自己顕示とは異なる隠蔽された形での誇大性の現れ方である。

(3) 自己顕示に対して過度な恥や自己嫌悪を感じる傾向があり、自然な自己顕示ができないこと。Kohut (1971) によれば、自己顕示に後悔や自己嫌悪を感じることは自己愛的脆弱性を抱えている人の特徴である。これは、顕示欲求が自己全体のなかにうまく統合されていないからである。適切に満たされることのなかった顕示欲求は自己のなかに統合されず、抑圧され、未成熟なままにとどまる。そのような未成熟な顕示欲求を抱えた人は、顕示欲求を刺激されると、強い緊張や恥などを体験する。そのため、かえって顕示を抑えがちになるのである。

(4) 傷ついて落ち込んだり不安にとらわれたりしたときに、それを自分で緩和する力が弱く、他者に緩和してもらおうとする傾向が強いこと。Kohut 理論によれば、強い感情に襲われたときに、平静さと力を備えた他者と一体化し、その感情を緩和してもらう体験が繰り返される時、その他者が果たしてくれた機能が内在化され、感情を自分で緩和する機能が生まれてく

る。こうしたプロセスがうまく進まなかった場合には、感情を自分で緩和する力が弱くなり、強い感情が生じたときには、それを他者に緩和してもらわなければならない。

(5) 生きることに意味や方向性を与えてくれる目標、価値、理想などが希薄または不明確であり、空虚感に陥りやすいこと。Kohut 理論によれば、重要な他者から自己を確認・承認・賞賛してもらうような体験が繰り返される時、自己を顕示して承認や賞賛を求める欲求が成熟し、内在化された野心が形成される。また、理想化された他者と同一化・一体化する体験が繰り返されるうちに価値や理想が内在化される。そして、人間の諸活動のうちのある領域において、こうした野心と理想が結びついて一つの目標構造が構成され、それが個人特有の才能や技能を活性化するとき、自己には意味と方向性が生まれる。このようなプロセスがうまく進まないときには、そうした目標構造も未形成または脆弱なままにとどまる。

#### 4. 自己愛的脆弱性尺度作成の方法

##### (1) 項目の収集

上記のような5つの側面に沿って項目を用意し、予備調査を行って項目を選定する。

##### (2) 項目の因子分析

収集された項目で構成される尺度を大学生に実施し、これを因子分析して因子構造を確認する。また、抽出された因子に沿って下位尺度を構成する。

##### (3) 信頼性の検討

作成された尺度の信頼性をクロンバックの  $\alpha$  係数によって検討する。

##### (4) 妥当性の検討

作成された尺度の妥当性を次の2つの方法で検討する。

##### ①他の自己愛尺度との関連

Gabbard のいう「周囲を気にするタイプ」の自己愛的人格は、Kohut のいう自己愛の障害と重なり合う部分が多い。だとすれば、Gabbard の理論に基づいて作成された高橋のナルシズム尺度 (高橋, 1998, a, b) と筆者らの尺度との間には一定の関連が見られるであろう。高橋の尺度は、Gabbard に基づいて「周囲を気にかけないナルシズム傾向」と「周囲を気にするナルシズム傾向」を測定するものである。前者を測定する 11 項目と後者を測定する 14 項目から構成されており、6段階で評定される。

## ②アイデンティティとの関連

アイデンティティ(同一性)と Kohut が考える自己とは、重なり合う部分のある概念である。自己心理学という自己と比較すると、アイデンティティは社会・文化的な自己定義を含む、より表層的なものであるが(Elson, 1987; Silverstein, 1999)、一般に自己が脆弱性を抱えている場合にはアイデンティティも形成されにくいであろう。だとすれば、自己愛的脆弱性を測定する筆者らの尺度とアイデンティティを測定する尺度との間には一定の相関が見られるであろう。アイデンティティの尺度としては、砂田(1979)の同一性混乱尺度(34項目版)を用いることにした。砂田の尺度は、2件法で回答させ、アイデンティティが混乱しているほど高得点になるように得点化される。

## 5. 結 果

### (1) 項目の収集

Kohut の著作、自己心理学に関する文献、自己愛の障害に関する文献、筆者らの臨床経験に基づき、自己愛的脆弱性を示す特徴を記述した75の項目を用意した。筆者らの尺度は、自己愛人格障害の査定だけを意図したものではなく、より軽症の自己愛の問題をも測定することを意図したものであるから、項目の内容もその方向に沿って作成された。これらの項目を岡山・広島の公立・私立大学生390名(男性190名;女性200名)に6段階で評定してもらい、否定的な方向に得点が高くなるように得点化した。この尺度に対して因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った結果、上記の5つの側面と対応すると思われる5因子が抽出された。そして、最終的には、51項目が有効なものとして残されたが、因子によって項目数にばらつきがあり、評定値平均にも偏りのある項目が見られた。そこで、項目の内容や表現を修正し、新たに52項目を用意した。

### (2) 項目分析と因子分析

予備調査で得られた52項目を、東京、千葉、神戸、岡山の国・公・私立大学の学生398名(男性127名;女性271名)に6段階で評定してもらった。結果を因子分析(主成分分析)し、固有値の減衰、累積寄与率、成分の解釈しやすさなどを考慮すると、5因子が妥当と思われた。そこで再度5因子と指定して因子分析を行った(表1)。この過程で因子負荷の低い項目を削除し、45項目が残された。これらの因子は、予備調査で得られた5因子とほぼ一致しており、以下

のように解釈された。

第1因子に負荷の高い項目(11項目)は、「『これからこのように生きていけばいい』という方向がわからない」、「自分の夢や目標に向かって自分のペースで進んでいる(逆転項目)」、「自分は何のために生きているのかわからない」などである。これは、生きることを方向づける目標、価値、理想などが希薄または不明確であることを表していると思われたので、「目的感の乏しさ」と名づけた。

第2因子に負荷の高い項目(12項目)は、「私は、優れた人や目上の人から認められたいという気持ちが強い」、「注目的になっている人を見ると、うらやましくてたまらない」、「自分の発言や行動が他の人から良く評価されていないと、そのことが気になってしかたがない」などである。これは、他者から注目、承認、賞賛が得られないと自己肯定感や心理的安定を保つことができず、注目、承認、賞賛を強く求める傾向であると思われる。そこで、この因子を「承認・賞賛への依存」と名づけた。

第3因子に負荷の高い項目(8項目)は、「落ち込むことがあると、自分の力だけではなかなか立ち直ることができない」、「精神的に不安定になると、だれかに電話したり話したりしないと落ち着くことができない」、「精神的に調子が悪いときに、身近な人が優しく接してくれないと、私はますます調子が悪くなる」などである。これは、傷ついたり情緒的に不安定になったりしたときに、その状態を自分で緩和 soothe する力が弱く、他者に緩和してもらわないと心理的安定を保つことができない傾向であると考えられる。そこで、この因子を「自己緩和能力の弱さ」と名づけた。

第4因子に負荷の高い項目(8項目)は、「全体的に見て、私のまわりの人の態度は不親切だと思う」、「私のまわりには思いやりの欠けた人が多いと思う」、「私は周囲の人からもっと高く評価されてもよい人間だと思う」などである。これは、周囲の他者に対して自分への特別の配慮や関心を期待し、周囲がそうした期待に応じしてくれないと不満や怒りを感じる傾向を表すと思われる。そこで、この因子を「配慮の要求」と名づけた。

第5因子に負荷の高い項目(6項目)は、「自分を出しすぎたと感じて、自己嫌悪に陥ることがある」、「ほめられたり良く評価されたりすると、何か落ちつかない気持ちになる」、「自分を出しすぎたり抑えすぎたりして、自分をうまく表出できない」などである。これは、自己を顕示したい欲求がありながら、自己顕

表1 自己愛的脆弱性尺度の因子分析結果（主成分分析・プロマックス回転／成分パターン行列）

尺度項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	共通性
Q34 「これからこのように生きていけばいい」という方向がわからない	<b>0.83</b>	0.09	-0.01	0.01	-0.06	0.70
Q38 自分の夢や目標に向かって自分のペースで進んでいる（逆）	<b>0.81</b>	-0.10	0.10	-0.03	-0.13	0.63
Q36 私には「こういうふうになりたい」と思う理想があり、そうなれるように努力している（逆）	<b>0.79</b>	-0.10	-0.03	-0.08	-0.10	0.59
Q39 うちこめるものや生きがいを感じるものが見つかり始めている（または、すでに見つかった）（逆）	<b>0.79</b>	-0.14	-0.02	0.05	-0.04	0.61
Q33 自分は何のために生きているのかわからない	<b>0.77</b>	-0.02	-0.01	0.08	-0.03	0.59
Q32 私はいろいろなことをしているが、どれも本当にやりたいことではない気がする	<b>0.73</b>	0.03	-0.14	0.06	-0.01	0.53
Q35 勉強や仕事には目標をもって意欲的に取り組んでいる（逆）	<b>0.67</b>	<b>0.00</b>	-0.01	-0.12	0.00	0.44
Q37 生きていることが空しく思ってしまう	<b>0.48</b>	-0.07	-0.05	0.18	0.21	0.35
Q41 「こうなったらいいのに」という空想ばかりしていて具体的な行動ができない	<b>0.48</b>	0.11	0.08	-0.04	0.15	0.28
Q43 現実の壁や困難なことにつつくと目標の実現をあきらめてしまう	<b>0.44</b>	0.11	0.11	0.04	0.03	0.35
Q42 何か始めても最後までやり通すことができず、中途半端なまま終わってしまう	<b>0.40</b>	0.06	0.10	-0.01	0.19	0.29
Q2 私は、優れた人や目上の人から認められたいという気持ちが強い	-0.06	<b>0.76</b>	-0.12	-0.01	-0.10	0.46
Q3 注目的になっている人を見ると、うらやましくてたまらない	0.00	<b>0.75</b>	-0.03	0.02	-0.14	0.51
Q6 私は、人から注目されたいという願望が強いのではないかと思う	-0.10	<b>0.71</b>	-0.06	0.04	-0.07	0.46
Q1 自分の発言や行動が他の人から良く評価されていないと、そのことが気になってしかたがない	0.10	<b>0.67</b>	0.00	-0.13	0.11	0.48
Q5 自分の言ったことやしたことを他の人がほめてくれると、うれしくて、しばらくそのことばかり考えている方だ	-0.20	<b>0.65</b>	0.00	-0.03	0.09	0.46
Q10 まわりの人に対して「もっと私に関心を向けてほしい」と思うことがある	0.01	<b>0.65</b>	0.01	0.15	0.06	0.56
Q8 優れた成果や成績をあげている人を見ても、それほどうらやましいとは思わない（逆）	0.09	<b>0.63</b>	-0.14	-0.07	-0.20	0.30
Q9 自分のしたことがほめられたり良く評価されたりすると、急に元気が出てくる方だ	-0.19	<b>0.62</b>	0.02	-0.04	0.10	0.43
Q12 相手が私から距離をとろうとしているように感じられると、私は非常に傷ついてしまう	0.09	<b>0.51</b>	0.09	-0.09	0.14	0.37
Q4 他の人が私の発言や行動に注目してくれないと、自分が価値のない人間になったような気がする時がある	0.05	<b>0.44</b>	0.16	0.08	0.19	0.46
Q13 知っている人が挨拶をしてくれないと、私は無視された気がして嫌な気分になる	0.09	<b>0.44</b>	0.05	0.02	0.08	0.28
Q7 私は、自分の良い所をほめられたり認めてもらったりしないと自分に自信がもてない	0.13	<b>0.41</b>	0.18	0.06	0.16	0.43
Q45 落ち込むことがあると、自分の力だけではなかなか立ち直ることができない	0.02	-0.05	<b>0.85</b>	-0.04	0.02	0.69
Q46 不安になったり落ち込んだりしたときに支えてくれる人がいつも身近にいてくれないと、私は生きていけないと思う	0.03	0.00	<b>0.84</b>	-0.10	-0.04	0.49
Q44 精神的に不安定になると、だれかに電話したり話したりしないと落ち着くことができない	-0.05	-0.10	<b>0.83</b>	0.06	-0.01	0.61
Q50 心配なことや悩みがあると、自分の中だけにとどめておけなくて、すぐにだれかに話す方だ	-0.10	-0.16	<b>0.82</b>	0.02	-0.14	0.54
Q48 つらいことや落ち込むことがあっても、自分で自分を励まして元気を取り戻すことができる方だ（逆）	0.13	-0.12	<b>0.72</b>	-0.03	-0.02	0.49
Q47 精神的に調子が悪いときに、身近な人が優しく接してくれないと、私はますます調子が悪くなる	0.01	0.16	<b>0.69</b>	0.01	-0.03	0.59
Q52 つらいことや苦しいことがあると、私は身近な人から慰められたり励まされたりするのを非常に期待する	-0.04	0.28	<b>0.56</b>	0.06	-0.09	0.51
Q51 精神的に調子が悪いと、自分の気持ちをコントロールできなくて、身近な人につけてしまう	0.00	0.12	<b>0.48</b>	0.01	0.04	0.31
Q29 全体的に見て、私のまわりの人の態度は「不親切」だと思う	0.03	-0.22	-0.02	<b>0.82</b>	0.09	0.60
Q23 私のまわりには思いやりの欠けた人が多いと思う	0.03	-0.22	-0.07	<b>0.77</b>	0.08	0.54
Q24 まわりの人の私に対する態度を「無礼だ」と思うことがある	-0.11	-0.14	0.09	<b>0.74</b>	0.16	0.55
Q28 まわりの人が私の良い点を認めてくれないので不満を感じる	0.11	0.11	-0.05	<b>0.71</b>	0.01	0.60
Q27 私は周囲の人からもっと高く評価されてもよい人間だと思う	-0.01	0.20	-0.03	<b>0.70</b>	-0.24	0.61
Q25 私は周囲の人からもっと尊敬されてもよい人間だと思う	-0.04	0.21	-0.06	<b>0.69</b>	-0.21	0.59
Q30 まわりの人に対して「もっと私の気持ちを考えてほしい」と思うことがある	0.04	0.03	0.04	<b>0.69</b>	0.05	0.53
Q26 まわりの人に対して「私をもっと大切にあってほしい」と思うことがある	0.01	0.20	0.07	<b>0.63</b>	-0.01	0.57
Q18 「あんなに自分を出すのではなかった」と後悔することがある	-0.11	-0.16	0.08	0.11	<b>0.80</b>	0.62
Q15 「自分を出しすぎた」と感じて、自己嫌悪におちいることがある	-0.18	-0.04	0.02	0.04	<b>0.73</b>	0.50
Q21 ほめられたり良く評価されたりすると、何か落ちつかない気持ちになる	0.03	0.00	-0.10	-0.06	<b>0.71</b>	0.47
Q17 自分を出しすぎたり抑えすぎたりして、自分をうまく表出できない	0.16	0.02	-0.05	-0.01	<b>0.64</b>	0.46
Q22 人と話しているとき、自分の話題で時間を取りすぎてはいけないと思って気にしている	-0.02	0.01	-0.16	0.02	<b>0.63</b>	0.37
Q20 人から注目されたいと思うのに、実際に注目されると落ちつかない気持ちになる	0.14	0.24	-0.07	-0.14	<b>0.55</b>	0.43
固 有 値	5.25	5.09	4.47	4.37	3.23	22.41
寄 与 率	11.67	11.31	9.93	9.70	7.18	49.79

\*（逆）は、逆転項目であることを示す。

因子間相関

	2	3	4	5
1	0.13	0.18	0.12	0.24
2		0.44	0.38	0.34
3			0.10	0.30
4				0.18

示を行うと恥、嫌悪感、不全感、後悔などがつきまとい、自然な自己顕示ができないことを表していると思われる。そこで、この因子を「自己顕示の不全」と名づけた。

(3) 二次因子分析

また、上の 5 因子による各被験者の因子得点に基づいて二次因子分析（主成分分析）を行ったところ、第 1 因子の寄与率が 40.09% であり、各下位尺度の第 1 因子への負荷量が 0.45~0.78 であることから、下位尺度同士は 1 因子構造を成していると判断された。

(4) 信頼性の検討

尺度全体について I-T 相関分析を行ったところ、各項目と全体との相関は 0.24~0.58 であり、尺度全体の  $\alpha$  係数は 0.90 であった。次に、下位尺度ごとに  $\alpha$  係数を算出したところ、表 2 のように 0.77~0.88 であった。「自己顕示の不全」尺度の  $\alpha$  係数 (0.77) が若干低いものの、信頼性は十分と判断された。

(5) 妥当性の検討

①他の自己愛尺度との関連

まず、高橋の尺度を因子分析（主成分分析）したところ、2 因子が妥当と判断された。そこで 2 因子と指定してバリマックス回転を行った結果が表 3 である。項目 No. 12 が両方の因子に負荷が高く、項目 No. 11 の第 2 因子負荷量がやや低い点を除けば、ほぼ高橋の言うとおりの因子構造となり、第 1 因子が「周囲を気にかけないナルシズム」、第 2 因子が「周囲を気にするナルシズム」と解釈された。そこで、それぞれの因子に負荷の高い項目の得点を合計して、周囲を気にかけないナルシズムと周囲を気にするナルシズムの得点とした。これらの得点と自己愛的脆弱性尺度試案の下位尺度得点との相関係数を算出したところ、表 4 のようになった（相関の違いを目立たせるために有意水準を 1% に設定）。まず「周囲を気にかけないナルシズム」は、自己愛的脆弱性尺度の「承認・賞賛への依存」および「配慮の要求」との間に正の有意な相関が見られ、「配慮の要求」との相関は比較的高かった (0.48)。次に、「周囲を気にするナルシズム」は、自己愛的脆弱性のすべての下位尺度と正の有

表 2 自己愛的脆弱性尺度の信頼性係数

	自己愛的脆弱性尺度の下位尺度				
	目的感の 乏しさ	承認・賞 賛への依 存	自己緩和 能力の弱 さ	配慮の要 求	自己顕示 の不全
$\alpha$ 係数	0.88	0.86	0.87	0.87	0.77

意な相関が見られ、とくに「承認・賞賛への依存」との相関はかなり高かった (0.70)。

②同一性混乱尺度との関連

砂田の同一性混乱尺度の一部の項目の表現を若干修正して用いた。3 件法で答えてもらい、アイデンティティが拡散しているほど高得点になるように各項目に 1~3 点を付与した。I-T 相関分析を行い、相関が 0.3 未満の項目を順次削除した結果、最終的に 17 項目が残された。これらを因子分析（主成分分析）したところ、第 1 因子の寄与率が 23.84% で、第 2 因子の寄与率 8.22% と大きな差があり、各項目の第 1 因子への負荷もすべて 0.4 を越えていたので、1 因子構造とみなすことにした。 $\alpha$  係数は、0.79 であった。各項目の

表 3 高橋のナルシズム尺度の因子分析  
(主成分分析；バリマックス回転)

	因子 1	因子 2	共通性
Q 18 自分はとても有能な人間である	<b>0.79</b>	-0.10	0.64
Q 20 人に対して強い影響力を持っている	<b>0.78</b>	-0.16	0.64
Q 19 自分の思うように人を動かす自信がある	<b>0.78</b>	-0.13	0.62
Q 17 自分は尊敬されて当然の人間である	<b>0.74</b>	0.01	0.55
Q 15 リーダーになる才能を持っている	<b>0.73</b>	-0.12	0.55
Q 16 いつも皆の注目の的である	<b>0.72</b>	-0.12	0.54
Q 21 自分の能力や独創性にかなり自信がある	<b>0.71</b>	-0.11	0.52
Q 22 人よりも常に目立つ存在でありたい	<b>0.67</b>	0.23	0.50
Q 24 自分がよくできるところを他人に示したい	<b>0.65</b>	0.22	0.46
Q 23 権威や権力を持ちたいという気持ちが強い	<b>0.60</b>	0.35	0.48
Q 25 何においても自分が正しいと思う	<b>0.57</b>	0.13	0.35
Q 7 ちょっとした批判ですぐ傷つけられる	-0.01	<b>0.75</b>	0.56
Q 2 他人から批判されると憂うつな気分が長く続く	-0.06	<b>0.74</b>	0.54
Q 6 批判に敏感なために引っ込み思案になりがちである	-0.15	<b>0.73</b>	0.55
Q 4 他人が自分に対してどのような反応をするかとても気になる	0.13	<b>0.72</b>	0.54
Q 5 自分が他人にどう見えているのかとても心配になる	0.11	<b>0.72</b>	0.53
Q 8 人前での失敗をいつまでも思い悩む	0.01	<b>0.72</b>	0.51
Q 3 他人から批判されると全人格を否定されたように感じる	-0.07	<b>0.68</b>	0.46
Q 1 他人の様子をいつもうかがってしまう	-0.02	<b>0.66</b>	0.43
Q 14 常に優れた人や目上の人に認めてもらえなければ、自信がもてない	0.24	<b>0.58</b>	0.39
Q 10 私は、臆病でほとんど自己主張ができない	-0.32	<b>0.56</b>	0.42
Q 13 非常に内気なため、争いごとは避けることが多い	-0.24	<b>0.49</b>	0.30
Q 12 集団の中で他人が注目してくれないと非常に傷つく	<b>0.47</b>	<b>0.48</b>	0.45
Q 9 他人から批判されると、強い憤りを感じる	0.33	<b>0.47</b>	0.33
Q 11 私はとても自意識過剰である	0.26	0.37	0.20
固 有 値	6.39	5.69	12.08
寄 与 率	25.58	22.74	48.32



表4 自己愛的脆弱性尺度と高橋のナルシズム尺度および砂田の同一性混乱尺度との相関

		自己愛的脆弱性尺度				
		目的感の 乏しさ	承認・賞賛 への依存	自己緩和能 力の弱さ	配慮の要求	自己顯示 の不全
高橋のナルシズム 尺度	周囲を気かけないナルシズム (誇大性)	-0.12	0.33 **	0.10	0.48 **	-0.11
	周囲を気にするナルシズム (過敏性)	0.41 **	0.70 **	0.41 **	0.37 **	0.48 **
砂田の同一性混乱 尺度		0.65 **	0.23 **	0.24 **	0.16	0.45 **

\*\*p&lt;.01

得点を合計して同一性混乱得点とした。この同一性混乱得点と自己愛的脆弱性尺度の下位尺度得点との相関係数を算出した(表4)。自己愛的脆弱性尺度の下位尺度は、配慮の要求を除いて同一性混乱尺度と正の有意な相関が見られ、とくに「目的感の乏しさ」との相関はかなり高く(0.65)、「自己顯示の不全」との相関もやや高かった(0.48)。

## 6. 考 察

自己愛的脆弱性尺度試案を因子分析した結果、想定したとおりの5因子が抽出された。項目の内容から判断すると、「目的感の乏しさ」、「他者からの承認・賞賛への依存」、「他者からの配慮の要求」、「自己緩和能力の弱さ」、「自己顯示の不全」の因子が確認できたと考えよう。また、二次因子分析の結果、これらの下位尺度同士は1因子構造を成していると考えられ、これらを一つにして自己愛的脆弱性尺度とすることに問題はないであろう。それぞれの下位尺度の $\alpha$ 係数も、1つを除いて0.8を越えており、信頼性も満足できる水準に達していると言える。

妥当性に関しては、自己愛的脆弱性尺度試案のすべての下位尺度が、高橋のナルシズム尺度の「周囲を気にするナルシズム」と正の有意な相関を示したことは、筆者らの尺度がNPIで測定されるような誇大性よりも過敏性を測定していることを証明するものであろう。そうは言うものの、自己愛的脆弱性尺度試案の2つの下位尺度、とくに「配慮の要求」が、高橋の尺度の「周囲を気かけないナルシズム」と比較的高い相関を示したことにより、筆者らの尺度の一部の下位尺度は、間接的に誇大性を測定できるのではないかと思われる。同一性混乱尺度に対しては、自己愛的脆弱性尺度試案の「承認・賞賛への依存」と「自己緩和能力の弱さ」が弱い相関を示し、「目的感の乏しさ」

と「自己顯示の不全」がやや高い相関を示したことで、一定の関連が窺われた。目的感の乏しさと自己顯示の不全は、自己愛的脆弱性尺度試案のなかでもとくに自己定義や自己表出と関連の深い側面であり、この2つの側面の脆弱性が同一性混乱と関連していたことは、納得できる結果である。以上の結果より、今回取り上げた尺度を通して見る限り、自己愛的脆弱性尺度試案の妥当性はかなり証明されたと考えよう。

## 7. 今後の課題

このように、筆者らが想定した5つの側面から自己愛的脆弱性を測定する試みは、ある程度妥当なものであることが証明された。しかし、今後の課題としては次のようなことがあげられる。まず、根本的な問題としては、この5側面の組み合わせがもっとも適切なのか、これ以外にも取り入れるべき側面があるのではないかという問題がある。これについては、この尺度をさらに発展させる研究のなかで検討していきたいと思う。また、妥当性の検討についても、今回取り上げたもの以外の様々な変数との関連だけでなく、神経症や人格障害の診断を受けた臨床群と健康群の間で得点に有意差があるかどうかの検討も必要であろう。さらに、今回の試案に関しては、予備調査を通して項目内容を修正したにもかかわらず、調査を行ってみると、評定平均値が高い方または低い方に偏る項目がいくつか見られた。今回はまだ尺度の作成途上なので、これらの項目を除去しないまま分析を行ったが、現在行っている研究では、これらの項目の評定平均値が中央に寄るように内容表現を修正し、再度項目を構成し直し、52項目から構成される最終試案を作成した。そして、現在、この最終試案の因子分析と信頼性・妥当性の検討を行っているところである。この結果は、改めて報告する予定である。

## 引用文献

- Broucek, F. (1982): Shame and its relationship to early narcissistic development. *International Journal of Psychoanalysis*, **63**, 369-378.
- Broucek, F. (1991): *Shame and the Self*. Guilford Press.
- Elson, M. (ed.): *The Kohut Seminars on Self Psychology and Psychotherapy with Adolescents and Young Adults*. W. W. Norton. (伊藤 洗監訳, コフト自己心理学セミナー 1・2・3, 金剛出版, 1: 1989, 2: 1990, 3: 1992)
- Emmons, R. A. (1984): Factor analysis and construct validity of the narcissistic personality inventory. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 291-300.
- 福井 敏 (1998): 誇大的な自己-自己愛性障害. *こころの科学*, **82**, 75-86.
- Gabbard, G. O. (1989): Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, **53**, 527-532.
- Gabbard, G. O. (1994): *Psychodynamic Psychiatry in Clinical Practice: the DSM-IV Version*. (館 哲朗監訳: 精神力動的精神医学 その臨床実践 [DSM-IV版] ③ 臨床編: II 軸障害. 岩崎学術出版, 1997)
- Hibbard, S. (1992): Narcissism, shame, masochism, and object relations: An exploratory correlational study. *Psychoanalytic Psychology*, **9**, 489-508.
- 葛西真記子 (1999): 日本版「誇大感 (Grandiosity)」欲求尺度作成の試み-Kohut の自己愛理論に基づいて-. *カウンセリング研究*, **32**, 134-144.
- 上地雄一郎・宮下一博 (1992 a): 自己愛の発達と障害およびその測定に関する研究の概観 [1]. *岡山県立短期大学研究紀要*, **37**, 107-117.
- 上地雄一郎・宮下一博 (1992 b): 自己愛の発達と障害およびその測定に関する研究の概観 [2]. *岡山県立短期大学研究紀要*, **37**, 118-127.
- Kernberg, O. (1970): Factors in the psychoanalytic treatment of narcissistic personalities. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, **18**, 51-85.
- Kernberg, O. (1976): *Object Relations Theory and Clinical Psychoanalysis*. Jason Aronson, Inc.
- Kohut, H.: *The Analysis of the Self*. International Universities Press, 1971. (水野信義・笠原 嘉監訳: 自己の分析. みすず書房, 1994)
- Kohut, H. (1977): *The Restoration of the Self*. International Universities Press. (本城秀次・笠原 嘉監訳: 自己の修復. みすず書房, 1995)
- Kohut, H. (1984): *How Does Analysis Cure? The University of Chicago Press*. (本城秀次・笠原 嘉監訳: 自己の治療. みすず書房, 1995)
- Lapan, R. & Patton, M. J. (1986): Self-psychology and adolescent process: measures of pseudo-autonomy and peer-group dependence. *Journal of Counseling Psychology*, **33**, 136-142.
- 宮下一博・上地雄一郎 (1985): 青年におけるナルシズム (自己愛) 的傾向に関する実証的研究 (1). *総合保健科学 (広島大学保健管理センター研究論文集)*, **1**, 51-61.
- 宮下一博 (1991): 青年のナルシズム (自己愛) 的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係. *教育心理学研究*, **39**, 455-460.
- 大石史博・福田美由紀・篠置昭男 (1987): 自己愛的人格の基礎的研究 (1)-自己愛的人格目録の信頼性と妥当性について-. *日本教育心理学会第 29 回総会発表論文集*, 155.
- 岡田 努 (1999): 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について. *立教大学教職研究*, **9**, 21-31.
- 岡野憲一郎 (1998): 恥と自己愛の精神分析. 岩崎学術出版社.
- 小塩真司 (1998): 青年の自己愛的傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連. *教育心理学研究*, **46**, 280-290.
- Patton, M. J., Connor, G. E., & Scott, K. J. (1982): Kohut's psychology of the self. *Journal of Counseling Psychology*, **29**, 268-282.
- Raskin, R. N. & Hall, C. S. (1979): A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
- Raskin, R. N. & Hall, C. S. (1981): The narcissistic personality inventory: Alternate-form reliability and future evidence of construct validity. *Journal of Personality Assessment*, **45**, 159-162.
- Robbins, S. B. & Patton, M. J. (1985): Self-psychology and career development: Construction of the superiority and goal instability scales. *Journal of Counseling Psychology*, **32**, 221-231.
- 佐方哲彦 (1986): 自己愛人格の心理的測定-自己愛人格目録 (NPI) の開発-. *和歌山県立医科大学進学課程紀要*, **16**, 63-76.
- Silverstein, M. L. (1999): *Self Psychology and Diagnostic Assessment: Identifying Selfobject Functions Through Psychological Testing*. Lawrence Erlbaum Associates.
- 砂田良一 (1979): 自己像との関係からみた自我同一性. *教育心理学研究*, **27**, 215-220.
- 高橋智子 (1998 a): 青年のナルシズム的傾向と母親・友人関係. 平成 10 年度千葉大学大学院教育学研究科修士論文.
- 高橋智子 (1998 b): 青年のナルシズムに関する研究-ナルシズムの 2 つの側面を測定する尺度の作成. *日本教育心理学会第 40 回総会発表論文集*, 147.
- Wink, P. (1991): Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 590-597.
- Wolf, E. S. (1988): *Treating the Self: Elements of Clinical Self Psychology*. Guilford Press.